

# 公務災害防止事業の推進

## ▶ 安全管理セミナーを実施して ◀

山形県南陽市消防団

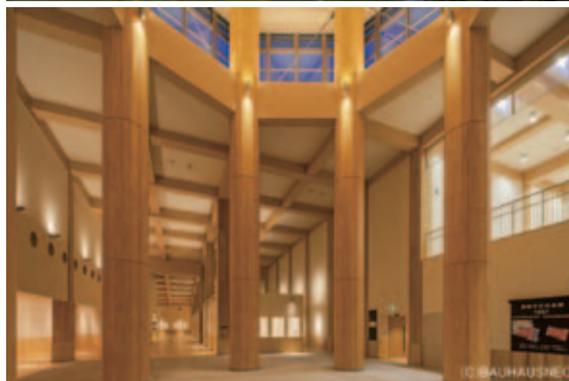
### 1. はじめに

南陽市は、東に奥羽山脈を控え、南から西にかけて吾妻山系と飯豊山系に囲まれた山形県南部の置賜盆地<sup>おいたま</sup>に位置します。沃野<sup>よくや</sup>が開け、米、野菜、果樹などの栽培が盛んに行われています。

昭和42年に、当時の赤湯町・宮内町・和郷村の2町1村が合併し、山形県内で13番目の市として誕生しました。

面積は160.5平方キロメートル、人口は約32,000人と風光明媚な県南自然公園に囲まれ、鉄道、道路交通網にも比較的恵まれた県南部の要衝の地にあります。

南陽市には、開湯900年有余の伝統ある赤湯温泉、宮内熊野大社、国指定史跡「稻荷森古墳」公園、郷土の民話を伝える「夕鶴の里・語り部の館」等の歴史と文化があります。さらに全国のスカイスポーツの中心として知られる「南陽スカイパーク」や市民の健康増進を図る「南陽市中央花公園（市民体育館）」などがあり、地域の歴史と文化を大切にしながら、市民の安全な暮らし、ライフサイクルに応じた安心な暮らし、そしてうるおいのある暮らしの実現を目指しています。



### 2. 消防団の沿革及び組織

昭和42年の町村合併により市制施行と同時に発足、南陽市消防団として宮内9、赤湯7、和郷6の22分団を設け、団長以下1,344名の組織でしたが、その後、機構改革と機動力の整備を図り、現在は8分団、21部、68班、自動車ポンプ10台、小型動力ポンプ付積載車21台、軽トラック4台、小型ポンプ33台を配備し、消防団員891名により一朝有事の際は、この人員と機動力を最大限に活用して災害を最小限に防ぐと共に、平時においても、火災予防の啓発に重点的に積極的に取り組んでいます。また、消防団員の安

全管理、安全確保のため、安全装備品の充実強化を図っています。

全国的に年々消防団員数が減少している中、地域の御理解と消防団幹部の努力により、県内の市では唯一消防団員の条例定数を30年間満たしています。

### 3. 消防団の活動

近年頻発する地震の強い揺れによる建物の倒壊、大災害等を想定した総合防災訓練を始め、春季消防演習、分団演習、多数傷病者事故対策訓練等に、関係機関と連携しながら積極的に取り組み、複雑多岐にわたる災害に対応すべく各種訓練に励んでいます。特に消防操法訓練は、毎年県大会を目指し、各分団とも長期にわたり、切磋琢磨し操法技術の向上を図っています。これは災害現場における迅速で安全な活動に大きく貢献しているものと思います。

さらに、東北水防技術競技大会においては、平成21年度・22年度・24年度・25年度と4大会連続山形県の代表として出動し、平成24年度山形県南陽市での開催地に引き続き、平成25年度福島県福島市での開催地出場における2年連続第1位「最優秀賞」を受賞、大会史上初の快挙を成し遂げました。

また、平成25年・26年と2年連続で南陽市内を豪雨災害が襲いました。南陽市は、消防行政無線や消防団デジタル無線等の整備を図り、また消防団と自主防災組織の合同訓練を実施する等、有事即応の体制構築を図っています。

毎年の水防訓練では、消防団は非常招集訓練や市民の避難訓練をはじめ、現場の被害状況に応じた水防工法訓練、自主防災組織への指導等実践即応の訓練を実施しています。



### 4. 安全管理セミナー開催の経緯

消防団事業の一つとして、毎年4月の第1日曜に消防団員の任免式(辞令交付式)を挙げており、同日には新入団員に対する普通救命講習会、消防団員意見発表会、班長以上の幹部団員への研修会を実施しています。幹部団員研修の企画として、当消防団では、計画的(隔年)に事故防止に対する知識を更に高め、指導する立場の幹部消防団員が主軸となり、部下への安全を配慮する必要性と消防団全体へ安全管理を普及することを目的に、講師の派遣や費用の助成がある「消防団員公務災害防止研修事業」を活用させていただいております。

今年度は、任免式当日の各事業を、木造コンサートホールとして世界最大の「シェルターなんようホール(南陽市文化会館)」に会場を集約し実施したことにより、消防団幹部をはじめ、多くの消防団員、消防署員、防災関係機関の職員が安全管理セミナーに参加できました。

## 5. 安全管理セミナーを終えて（消防団班長のアンケートから）

平成29年4月2日（日）消防基金S-KYT指導員の加藤正実氏を講師としてお迎えしました。

安全セミナーを受講した消防団班長のアンケートから感想を記させていただきます。

「消防団員としての経歴が長くなるにつれ、各種訓練および火災・災害時における行動の慣れや油断が大きくなると思います。

今回の安全管理セミナーに参加して、改めて安全かつ無事故で活動を終息する事の責任と重圧を感じ、様々な場面において安全に対する意識をそれぞれが強くなり自覚しなければならぬと感じました。

私は、今年度は班長という責任があり、新入団員はもちろんのこと、部下の行動にも目を配り、危険要因の把握や安全の確保さらには安全優先の活動方針を決定することが求められます。セミナーを受講することで、全団員が目的

を定め、タッチアンドコールで意思統一すること、『必ず実行し目的を達成する。』という潜在意識を一人一人に植え付けることで、災害現場等での安全確実な行動ができると確信することができました。

『S-KYT』は、初めて耳にした言葉ですが、現場に潜む危険を見抜く能力を養い、忠実に基本に従い行動する力を植え付けるこの訓練は、非常に効果的と確信しました。ぜひ、所属班に持ち帰り機会をとらえながら団員に伝達したいと思います。

私たち消防団員は、ハインリッヒの法則も意識しながら、常日頃の行動においても、消防にかかわる人間として安全優先の自覚を持たなければならないことを学びました。

『いざ』という場面に遭遇した際には、消防団員を統率する班長として、安全管理を第一に指導できるリーダーシップを発揮できるよう心掛けていきます。」

